

孟宗竹

高橋俊助

久しぶりに娘の家を訪ねると、最近すっかり口が達者になった孫娘が笑顔で迎えてくれた。後ろでは三歳年下の孫も、覚束ない足取りで顔を見せた。孫に手を引かれ居間へ入り、腰をおろすと、腰に少しひんやりしたものを感じた。

「暑くなってきたでしょう。竹ラグにしてみましたの。どう、涼しい感じしない？」
そう娘に言われて薄茶色の竹ラグの感触を手で確かめると、心地よい涼感が伝わってきた。

今度は思い切ってそこに寝そべってみた。すると体全体にひんやりとしたものが広がった。

「孟宗竹か」。ふっとその言葉が口をついた。

あの日、海に投げ出され、孟宗竹にしがみついて、海を漂った。昭和19年11月、フィリピンへ向かう摩耶山丸の中に私はいた。レイテ島で大敗を喫したことや目的がフィリピンへの増援だったことは戦後になって知った。摩耶山丸はヒ81船団に属していた。軽空母の「神鷹」をはじめとする護衛艦を伴い、大型タンカーや陸軍特殊船で構成された船団だった。摩耶山丸は貨客船に近い外観だったが、その構造は上陸用舟艇を発進させるための全通甲板になっていた。兵隊は船内に押し込められ、身動きもとれなかった。暑苦しさの中で何かに耐えるようにして、じっと身をよせあっていた。しかし、結末はあつけないものだった。僚船の「あきつ丸」が潜水艦の攻撃で沈んだのと同じように、摩耶山丸も2発の魚雷でわずか数分の内に沈没した。海に投げ出された私の目の前に流れてきたのが、たくましい孟宗竹だった。「これだ、これにつかまればなんとか」。その思いだけで私は竹にしがみついた。そして暗闇の大海を漂った。それは孟宗竹が私にくれた幸運だったかもしれない。多くの兵隊が海の中で命を落とし、故郷の土を二度と踏むこともできなかった。

孫の体の重さと甘い香りが私を微睡みから覚醒させた。孫は私の腹の上に乗る、体を揺する。私の孟宗竹の記憶を再び記憶の底へ押しやるかのように、そこに孫の笑顔があった。